

「東北の復興を担う地元キーパーソン育成・支援活動」第一回目開催

三井物産環境基金の助成を受け当会が実施している、「東北の復興を担う地元キーパーソン育成・支援」活動の第一回目が、仙台会場で4月13日（金）、気仙会場で4月14日（土）に開催されました。

当日は、両地域ともに約30名の参加者が集まり、加藤三郎環境文明21共同代表の趣旨説明と藤村コノエ共同代表によるガイダンスの後、午前中は滋賀県琵琶湖環境研究センター長内藤正明氏並びに民族研究家結城登美雄氏の講義、午後は、それらをベースに「2030年子どもたちにどんな地域を残すの？」をテーマにWSを行いました。

趣旨説明 加藤三郎共同代表

大勢の方にご参加頂き、大変嬉しく思う。東日本大震災から一年余りたったが、今日ここにお集まりの皆様も、色々な形で震災と向き合っていることと思う。復興が進んでいるところがあれば、まだまだ手のついていないところもある。

私たち環境文明21は、東京をベースとして全国レベルで活動するNPO団体である。私たちとしては、これまでの経験を活かし、震災を機に持続可能な社会を作る主体となる人材を育てるような手伝いができればと考え、「東北の復興を担う地元キーパーソン育成・支援ワークショップ」を企画した。また、私たちがこうして活動できるのも三井物産環境基金という助成のおかげだが、同時に、地元MELONや仙台市役所の多大なご協力を得て、ここまでこられた。この場をお借りして御礼を述べたい。

環境文明21は、1993年に設立した環境団体で、今年の秋で20年目に入る。日本の社会を持続可能な社会に転換することを目指して、自らの調査研究に基づく政策提言を行うNPOである。例えば、国会議員や地方議員、行政、そして市民に働きかけを行っている。活動の柱は価値観の変更、制度の変更、そして良い技術を推奨していくこと。その変える方向性としては、循環、共存、抑制という三つのキーワードを考えている。



キーワード	価値観の転換	制度の変革	技術の革新
循環 <small>(地球の限界のなかで人類社会の持続性の確保)</small>	<ul style="list-style-type: none"> ●「経済」と「環境」と「人間・社会」の真のバランス ●短期的な利益でなく、長期にわたる持続性の尊重 ●リサイクルや自然への還元に努める ●環境教育の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ●憲法に環境条項を含む持続可能性概念の導入 ●環境税など経済手法と規制の適切な組み合わせ ●環境学習や研修を通じて、現行制度の問題点と変更の方向性を学ぶ ●自然エネルギーの積極的導入 	<ul style="list-style-type: none"> ●資源の有効利用や低炭素化のための技術の開発と普及
共存 <small>(生きものあつての人間の生存及び人と人の共生の自覚)</small>	<ul style="list-style-type: none"> ●生きものの生命を慈しむ生物観の普及 ●すべての人を「地球市民」として受け入れ、人類社会の多様性と持続性の確保 	<ul style="list-style-type: none"> ●生物多様性の保護法制・行政組織の強化 ●化学物質の管理強化 ●環境ODAや民間ビジネスを通じて資金、技術、人材面での国際協力の強化 	<ul style="list-style-type: none"> ●途上国への技術移転、共同研究開発の強化 ●CDMを含む直接投資や合併などによる民間技術の移転
抑制 <small>(貪欲は結局は人間社会を破壊するという自覚)</small>	<ul style="list-style-type: none"> ●「足るを知る」「もったいない」という感覚を大切にする ●「環境倫理」や「企業の社会的責任(CSR)」の確立と普及 	<ul style="list-style-type: none"> ●環境の価値や保護コストを価格、料金などに徹底的に内部化 ●環境負荷に対し、税・課徴金を導入(一方で、低負荷商品やサービスに対しては税等で優遇) 	<ul style="list-style-type: none"> ●技術者教育を改める ●美・安全・優しさ、低環境負荷などの具現

地元の復興を担うためには、お金や予算、資材、機材等が必要だが、もっとも必要なものは優れたやる気のある人だと思う。この人とは、年齢や職業に関係ない。一肌脱いで頑張っていこうとする人。こうした人を我々はキーパーソンと呼んでいるが、そのキーパーソンのパワーアップを行っていききたい。短期的に今日明日の問題に取り組むことはもちろんだが、10年50年といった中長期的な視点を持てるような人が育つのをお手伝いしたい。

また、各回のテーマに合わせ、一人は学者研究者の立場から、もう一人は実践家の方に来ていただき、話題提供して頂く。その後参加者全員で話し合いをする。また、全6回の開催で、中には特定の回だけの参加を希望している方もいらっしゃると思うが、私どもとしては、できたら全6回に参加していただきたいと思っている。他分野のテーマを聴くことによって、専門分野に繋がることもあると思う。全6回の中で、持続可能理念の再確認と個々の活動への反映をしていただけるといいと思っている。また、新たなネットワークづくりとパワーアップにつなげて頂きたい。

ワークショップの進め方の説明 藤村コノエ共同代表 省略

話題提供1 「自然共生的な持続可能社会への転換を目指して」 内藤正明講師

現在は滋賀県にある琵琶湖環境科学研究センターのセンター長を務めている。この研究センターは地方のものとしては相当立派なもので、自分で言うのもなんだが、来られた誰もが驚かれる。なぜかというと、琵琶湖の水は、京都そして大阪といった下流域約1400万人の飲み水を供給しており、関西の安全を守る役割を担っている。昔は琵琶湖以外にも水源は色々あったはずだが、現在は琵琶湖が主な供給源となっている。



現在、我々がマスコミに注目されていることの一つに、福島原発のような事故が福井原発に起きた場合どうなるかということの分析結果がある。私どもは福井原発が事故を起こした際のありとあらゆる状況を予測できる仕組みを構築しており、その予測技術では日本でもトップクラスだと自負している。では、実際に福井原発に事故が起きてしまった場合、琵琶湖に影響が及ぶのか及ばないのかというと、結論は間違いなく影響を及ぼす。状況によっては、飲み水として使えなくなってしまう可能性が高い。ということでここ数日関西は、その危機意識が最高潮になっている。

かなり前から、私は持続可能な社会とは何なのかについて研究調査を行っているが、今日の私のタイトルには「自然共生的な」という形容詞をつけている。今日は特にこの部分についてもお話したいポイントだと思っている。

今回は「持続可能」という言葉をしきりに使用するが、なぜそんなことを言わなければ

いけないかという、リオサミット以来、「持続」ということがキーワードになっている。何千年も地球上の生活をしてきた人類が、ここにきて持続できるかどうか、ということになってきているのだから、極めて深刻な状況になっていると考えるべき。生き延びられないかもしれない、という可能性が現実を帯びてきている。

今回、持続可能について何が心配されているかを整理したものを図に示している。皆さんも大半のことは聞いたことがあると思う。一つ目は地球環境問題で、最たるものが異常気象や地球全体の生態系が回復不可能、すなわち絶滅するところまで崩壊している。また資源の枯渇化として、石油の生産量はピークを迎えている。また、日本は地理的に恵まれておりあまり感じないが、世界的にみて水資源は枯渇化が深刻なものになっている。現在、中国が日本の山林を密かに手に入れているという話を聞くが、あれは山林が欲しいのではなく、水が欲しいから買い取っている。

こういう物理的な現象以外に社会的な危機も深刻になっている。グローバル経済が非常に不安定な状況になってきており、これは日本も例外ではなくむしろ深刻な状況であるといえる。一方、地方の経済は震災以前から限界集落になっている地域が多い。現在日本には現在集落が 3000 か所存在する。これで日本の国が成り立つ訳はないのに、いつまでものんびりしている日本の状況を私は不思議に思う。また経済格差の拡大や若者の雇用の問題も深刻である。地域が廃れてくれば、その場所の文化や伝統も衰退していく。伝統や文化は震災の復興には関係があると思うが、これをどうするか。高台移転など、新しい場所へ移り住めればいいというわけではないと思う。伝統や文化なくして本当の社会が成り立っていくとは思えない。しかし、日本は戦後の 60 年間、こういった要素を極めてないがしろにしてきたと思う。こういうことを切り捨てることによって、経済的な豊かさを代償として手に入れていった。このまま進んでいいものだろうか。こういったことをここに整理してみた。これらの問題は偶然同じタイミングで出たわけではなくて、近代科学技術文明の代償として必然的に起こったといえる。石油に支えられた経済的な豊かさには副作用が伴い、その副作用がぼろぼろに蝕んでいるのが現在の状況だと思う。

産業革命以降、人口は爆発的に増加した。これはエネルギーの使用量が増えたためであり、こうして現在の社会は成り立っている。問題は、この状態がこのまま発展していけるのかということ。まだ発展できるという妄想を抱いている人は日本にもいるが、もうそんなことはないだろう。持続可能な社会に行くには、増加しているエネルギー使用量をいかに抑えていくかということだが、今のまま何もしないでいると突然エネルギーが使えなくなるという状態になる可能性も議論の中ででてくる。議論している中で、すでにサステイナブルではなくてサバイバルというべきだという話もある。

人を支える地球の扶養力を示す「エコロジカル・フットプリント」の推移をみると、1900 年代以前にすでに限界を超えてしまっている。旭硝子財団が発行している著書には「最後



の木が朽ち果て、最後の川が汚染され、最後の魚が獲られたとき、初めて、我々はお金を食べて生きていけないことに気づくのです」という文章がある。

次に石油の生産量のデータを示すが、石油生産量は 2004 年ころをピークに、減少に向かっている。私が幼少のころは便利なものはなく、家族全員が何らかの役割を持って働いて生活していた。家族での私の役割は風呂係で毎日水を汲んで薪でお風呂を沸かしていた。それが今では、水道をひねるだけで暖かいお湯が出る時代になってしまったことに驚き、最初は抵抗感を感じていた。生活レベルの向上に伴い、エネルギー使用量が増えていることはデータからも分かる。ということは、これからの時代、エネルギーの使用が出来なくなるに伴い、生活のレベルはどんどん下がっていくことは間違いない。私たちの年代の人は、一番化石燃料を使用した時代に生きて、石油が無くなるころにはいない。しかし、将来世代の人にとってみればこれからも生きていく訳で、大きな問題となる。これからの時代、脱石油ということは避けられず、今から真剣に考えていく必要がある。それとともに、石油で支えられてきた豊かさは、享受できない。いまは衣類、建物、道路、家電製品、食べ物など石油で出来ているようなものである。

つまり石油に支えられている今の時代はつかの間の繁栄であるということ、もしかすると石器時代にまで人類は戻るのかもしれない。そうならないために、石油に代わるエネルギーが必要だが、そこで原子力を使うとなると、それはまた別の議論になってしまう。

ある研究機関が示した 20XX 年のシナリオの一つとして、例えば「・コンビニは配送用のトラックが動かず、品数が激減し、夜は節電のため閉店。・野菜などの外国産が姿を消し、国産の野菜が高値で売られるが、量が少なく、一般家庭ではほとんど買えない」などが示されている。これを学生に見せたら、これでは生活していけない、と言っていたが、実際これだけ贅沢しているのは、日本を含め少数の先進国であって、アフリカやアジアの後進国では、これがあたりまえの生活であることを忘れている。

現在、各自治体が CO2 排出量の削減に取り組んでいる。私が働きかけた滋賀県では 2030 年に半分まで減らすと宣言した。宣言したのは 7, 8 年ほど前だが、当時は県外の人はもちろん県内の人々も驚いて議会等で大きな議論となった。その時、知事が激しく議員から攻撃されたが、知事が「できる、できないといった議論をしている段階はもう終わっています。しなければならないのです。」の一言で議事を黙らせた。あの時の議論の回答はあれでよかったのか、いまだ話には挙がるが、少なくともあの時の議論が社会に与えた影響は大きかった。その後、京都市と京都府が 40%を宣言した。その他にも、多くの自治体が CO2 排出量の宣言をしている。ただ、実際削減していくのはかなり大変なこと。私も半減のためのシミュレーションをしているが、いくら計算してもなかなか減らすことはできない。

そこで今日のポイント 2 として、ここに 2 つの社会像 (A.先端技術社会、B.自然共生型社会) を示しているが「これからどんな社会を目指すかということをも本



気で考えてから動かないといけない」ということ。

例えば、市役所の車を燃料電池車にしたとか自信満々に言うが、そんなもの排出量の削減になんぼの効果もない。やるなら市内の車全部とかを打ち出さなければならない。京都は「てんぷら油を使った回収車」というが、たかが数台のことで何の話にもならない。また A.先端技術社会をめざす中で、エネルギーが必要なら、自分たちの住んでいる地域に原子力を稼働させてみるくらいの覚悟が必要。それを選択するのも選択肢の一つとして有りだと思う。

また、霞が関に居る人たちは東京の街を窓からみているから、A.先端技術社会が日本の社会だと当たり前のように思い込んでしまっている。私は、それをあきらめて滋賀に戻ってきたときに、琵琶湖をみて、東京のようにはいかないと感じた。だったら、滋賀県は、より便利で快適な生活を求めるという、これまで日本が行ってきた方針を変える。そして、他で価値を見出すようなことをしていく。言いかえれば清く貧しくということを受け入れるような考えを打ち出した。

A.先端技術社会と B.自然共生型社会のどちらを目指していくのか、東京や大阪は先端技術を目指したいなら目指せばいい。自前の原子力を建てて、リスクを背負いながらもそのエネルギーで豊かな生活を送っていけばよい。ただ、滋賀県は、清く貧しく平和に暮らしたい。これこそ滋賀が選ぶ道と言える。でも滋賀県全体がそういう気持ちになっているかと言われるとそうでもないのは事実。

また A か B どちらかを、という究極の選択をするわけではなく、どちらの何を選択していくかが重要だが、それは結局のところ価値観によるもの。

朝日新聞では、枝野さんと前原さんを挙げて、社会経済はどうあるのかというものに、エダノミクスとマエハラノミクスというものを示していた。エダノミクスとは、成長にこだわらず、幸福を実感できる新しい暮らしを求める考え方。マエハラノミクスはグローバル市場に進出し、あくまで成長を追求するもの。問題はこの辺をどうとらえるのか。

行政は革新的な環境エネルギー技術の開発強化を挙げている。しかし、行政が「革新的な」とか「超」という言葉を言うようになると、大体その業界は終わりだと感じている。

エネルギーの選択はどうすればいいのか。エネルギー源は文明の姿を決めるようなもの。原発事故により、原子力エネルギーが困難になった。かといって、化石燃料に戻ることはできない。とすると自然エネルギーを使用することになる。ただ自然エネルギーは量的、質的に厳しく、特徴としては太陽光に依存するためエネルギー密度が低く、大規模集中には不向きな仕組みである。となると、高いエネルギーを必要とする産業や都会は、自然エネルギーでは賄えない。そして分散型のエネルギーとそれで賄える産業が主流になる。いってみれば身の丈の合ったローテク化になる。そういう技術が沢山出てくる。それは昔に戻るといふ部分もあるが、ある意味ではもっと知恵が集約された新しい技術が開発されるチャンスかもしれない。

お茶を運ぶ江戸のからくり人形などは電気等を一切つかわないものの、ある意味ではハイテク技術といえる。今後産業の軽装備化に進んでいこう。資金も、地元の信用金庫で足りる程度の資金で運営していく。信用金庫とは、地元で融資するためのものだから、こういうことには積極的に取り組む金庫も多い。今後、小規模の企業が多くなっていく。一方大企業が無くなっていく。働き方や雇用も大規模のものから、小規模の分散化になっ

ていこうらう。

対策手段の選択としての事例だが、支援を受けて国内に建設した立派な大規模メタン発酵プラントだが、使い道が無くなって処理にも困っている。一方、中国の山奥では地面に簡単な槽を設けた同じ原理で自分の家に還元している。また発酵残渣は周りの畑にまいている。このように使う場所を間違わなければ非常にいい技術でも、使い方を間違えると大変なことになる。前者の場合、残液の使い道すらなく困っている。技術の良し悪しは、その技術単独では決まらず、その地域が何を受け入れて役立てるかである。

今回震災の影響により、大規模水処理場は大きなダメージを受けた。地元の専門家によると、処理場がもとに戻るには、しばらくかかるだろうと。一方、震災地域の浄化槽は多少の被害はあったが浄化槽としての機能を保っている。

滋賀県では、2030年にCO2排出量を半分にする方針が決定しており、その取り組みを「滋賀県低炭素社会実現のための行程表」として示している。この行程表はよくまとまっているので、これらの参考にさせていただきたい。生活のためには何がしたいのか、そのためにはどのような要素があるのか、それを支える技術や活動などを示している。日常のものだけをしっかりやっているだけではいけない。その活動がどの部分に結び付いているのかを考えていく必要がある。我々はこれを実現するために細かい計算をして、工程表を作っていたが、知事はこれを県民に分かり易く説明するため「持続可能な滋賀社会ビジョン」として絵を描いた。一方、市のレベルとして何が出来るかということで「東近江市民会議での意見」として2030年市民の望む暮らしを伺った。それをまとめて分かったことだが、生活時間の配分が大きく変わることが分かった。これが変わると、人と人との繋がりが増えてくる。これまでは、お金に換えてしまっていた。そのほか人と自然との繋がりができてくる。経済は外から入ってきたおカネは減るものの、中でまわっているおカネは減らないという結果になった。このことから経済的にも決して減っているとはいえない。

ポイント3として、これまで日本は、歴史的には戦前には強兵ということで軍人を育てることを行っていた。戦後は産業復興に変わり、企業で働いておカネを稼ぐための勉強をしてきた。しかしこれからは、戦士の養成から真の市民の養成に変わっていくべきだと思う。

そして最後に、今回の大震災を見た外国人から、「これほどの社会秩序を保てるのか」との世界中から賞賛の声が上がった。ただこれは震災前から言われていたこと。大震災直前のアラブ系の番組で、イスラム教の聖職者が「日本人の行動規範こそイスラム教が教えてきたこと。何故それが日本人に受け継がれているのか」と述べていた。また震災後にもフランスの駐日大使が「私がどうしても滅びてほしくない一つの民族がある。それは日本人だ」と述べた。

どんなにソーラーなどのや技術が発展したとしても、本来昔から日本人が持っているもの、これが持続可能な社会をつくるために重要なことだと思っている。



話題提供2 「地域復興の7つの条件」 結城登美雄講師

内藤先生のお話を伺って、大体お話しすることはなくなってしまったなと感じている。この1年つきつけられるように様々なことを考えて過ごしてきたが、深く心に印象に残るお話だった。ただ、本当にそのような社会を実現するには、私たちの心に刻まれて刷り込まれた遺伝子が抵抗するだろうとも感じた。内藤先生がおっしゃったような、持続可能な社会に向けた道筋は、一人ひとり真剣になって自分たちが実現しなければいけないと感じた。



東北には過疎地とか限界集落と呼ばれる農山村漁村が多く点在する。私は、そういった地域を100か所以上訪ねて、そこに生活する3000人ほどのお年寄りのお話を聞いてきた。あまりに多くの人々に話を聞いたため、膨大なメモが残り整理しきれないほどである。

今日、「地域復興の7つの条件」という大げさなタイトルを付けた理由として、大都市であろうと小都市であろうと20人程度が生活する集落であろうと、人が生きる場所というものはどういうものが大切なのか何か。それを教えてくれたのは、「どこにも行き場所がなく残っているのだろう」と思われているお年寄りたちが私に話してくれたことであった。その条件を整理していくと、私の理解では少なくとも7つが挙げられた。

昨年の東日本大震災では、沢山のお世話になった方が亡くなった。報道などによると、死者の9割は水死によるものだと言われている。つまり海辺で生活している人たちに被害が多かったとのこと。本当はすぐにでもお見舞いに行くなり、手伝いに行くなりしなければいけなかったのだが、正直なところ怯えて生活していた。電話が通じた人からは震災と海の悲惨さを聴くばかりで、どんな顔して現地へ訪ねていけばいいのか、非常に怖かった。2、3カ月経ってからようやく現地を訪れた。訪れた場所は、陸前高田、気仙沼、石巻、女川町など震災以前から訪問していた場所である。現地の被害の凄まじさは報道されていた通りのものだった。現地の人に話を聞くと、失われて初めて、住んでいた場所の素晴らしさが分かったと言っていた。

そのような中で、風景や人など様々なものが私に問いかけてきた。もっとも問われたものは、食料とエネルギーについてだった。

私は、20年以上前から山村漁村を歩こうと思った。その場所は、遠くから見れば単に過疎地だ、限界集落だと言われる地域でも、実際に行ってみると今日明日の食べ物を支えてくれている人々の営みの場所であるということ。この国は、産業論でしか人の値打ちや営みを評価できない社会になってしまっている。あえて言うと経産省的な考え方である。食糧は産業論のレベルをはるかに越えて、人間の存在に関わる存在論の問題として私たちの社会を問いかけていくだろうと感じている。そんな中、農水省は1000人規模の食糧を担っている農家については補償するが、20人程度だと切り捨ててしまう。数字ばかりを追った政策を行っている。しかし、数字上で10人だろうと1000人だろうと、人間にとって不可欠な食糧を作っている人々に対しては、いずれも軽んずべきではないと考えている。

エネルギーというのは、私たちの生存に関わる不可避のテーマである。行政はエネルギー

一のようなものこそインフラ整備であると思ひ、税金をかけるのが当たり前だといふやうなっているが、私は食料こそが最大のインフラ整備だと思つてゐる。そう認識できずに、美味しいとか、安いという程度でしかみることができずに、商業資源の中に絡みとられてしまったようにしかみられない。私たちは改めて食糧について向かい合うことを問われていると思ふ。

データをみてみると、自給率は現在 40%を下回つてしまつた。そしてエネルギーの自給率は 17.9%となつてゐるが、原子力を除くと 4%にまで落ちてしまふ。日本といふ国は、人間社会に不可欠な要素がここまで低い。しかし、そのことに真剣に向かい合う機会もなく、なんとなくやり過ごして、豊かさ豊かさと言つてゐる、またお金で何でも手に入れることができると思つてゐる私たちの価値観が今問われている。外に頼つてゐるばかりで本当に大丈夫なのか。

都道府県別の食料自給率を表に示しているが、地域によつて大きく異なることが分かる。東京は 1%、大阪は 2%しかない。その中で東北は合わせると 108%程度になる。あくまでカロリーベースだが地域でいうと 100%を越えているのは、北海道と東北だけである。さらに東北は多様性という意味では非常に恵まれてゐる。

北海道	195	東京	1	滋賀	51	香川	36
青森	118	神奈川	3	京都	13	愛媛	37
岩手	105	山梨	20	大阪	2	高知	45
宮城	79	長野	53	兵庫	16	福岡	19
秋田	174	静岡	18	奈良	15	佐賀	67
山形	132	新潟	99	和歌山	29	長崎	38
福島	83	富山	76	鳥取	60	熊本	56
茨城	70	石川	49	島根	63	大分	44
栃木	72	福井	65	岡山	39	宮崎	65
群馬	34	岐阜	25	広島	23	鹿児島	85
埼玉	11	愛知	13	山口	31	沖縄	28
千葉	28	三重	44	徳島	45	全国	39

私たちは地域づくりと言ふけれども、国家よりも、企業よりも地域の大切さが重要なのではないかと考へてゐる。では、人と人とのつながりやコミュニティを考へたときに、日本にとつて地域とは何なのだろうか。これについても 3000 人の人々からお話を聞いている中で、これではないかと思ふものが分かつてきた。

地域は地理学的概念と社会的にはコミュニティという概念で考へたがる。私が思ふ地域とは、「家族の集まり」である。30 組くらいの小さな村もあるだろう。10000 組以上の大きい都市もあるだろう。これらはただ、大きさを変えているだけであつて、その原点は「家族」というものをベースに考へたいと思つてゐる。

人の集まり、一緒に暮らすことを考へた時、私は日本の村に興味を持つやうになつた。

日本の村とはどれくらいあるのか。どんな生活をしているか。現在では大都市と呼ばれてゐる東京や仙台も、昔はそんなに人が集まつてはいなかつた。京都も 1000 年、1500 年と歴史はあるだろうが、それ以前を考へれば昔は村であつた。持続可能をテーマにするなら、日本の村こそ長い間持続してきた、いわばお手本にしていくべきものである。ここ半世紀の急速な発展による結果、「過疎だね～、限界集落だね～」と言われてしまふ地域も、実際に話を伺つてみると、300 年前の江戸時代から、または 500 年、1000 年以上前からその場所で営んできていることが分かる。今日、こういった村や集落を地方という言葉に言いかゑられているが、私にとって、農山村漁村は地方やローカルではなく、自然の上に立つて営みを持続している場所だと考へてゐる。東京は自然の上に立つて営みを続けているという自覚が極めて薄い場所である。文明社会だけを考へていった結果の都市である。そこに降りそそぐ太陽の光や風、ながれる水についても人口でなんとかなると考へてゐるやうな場所である。高層ビルの中に水を通して、これが自然だと言つて設計した人を有名

建築家だと評価するような人々の集まりである。もう一度、地域の集まりとして家族を考えてみてはどうだろうか。家族があり地域があって、そして国があり世界がある。行政は、その一部を付託されているだけなのだが、昭和 40 年ころから何かを勘違いして偉そうになってしまったことに憤りを感じている。

では家族とは何だろうかと考えるようになった。20 年ほど前に私は仕事を辞めて、農村山村漁村に出向くようになった。以後、私はずっとフリーターをやっている。こうなったのには次の言葉との出会いが少なからず関係している。家族とは、ファミリーと呼んだりするが、この語源はラテン語の「ファミリア [FAMILIA]」からきている。ファミリアにはもう一つ「ファーマー [FARMER]」という言葉が生まれている。このファミリーとファーマーは同一のファミリアを語源とすることを知った私は「家族とは一緒に耕し、一緒に食べるものたち」と定義した。これは私の恣意的なものであるが、そんなに歪曲しているものでもないと思っている。ここ 2000 年の人類史の中の 9 割以上の期間においては、家族とは一緒に食べるものたちを意味していたと思う。内藤先生もおっしゃっていたように、私たちが幼少のころは家族の距離が近くそれぞれに役割分担があった。それが、現在では家族の距離が離れてしまっている。

青森田舎館村の田んぼの下から弥生時代の水田跡が見つかった。これはこれまで考古学会と作物学会の中で定説だった「東北に稲作が定着したのは鎌倉時代」を覆すものであった。この田んぼの発見が一気に東北の稲作史を変えてしまった。この田んぼに実際行ってみるとその周りに足跡が沢山あり、当時の家族の様子が伺えるものである。縄文の時代の家族の豊かさが伺える半面、裏返すと大変不安定。にもかかわらず何故厳しい東北で稲作を行ってきたのか。それはつらく貧しいことなのか。東北に生きるということは、長き冬を乗り切ること。苦しい時にお米と出会った。お米と出会うことによって、東北は大きく変化した。はじめて、東北で生きることを保障したのがお米をたがやしたことによるもの。日本の水田の 27%は東北にある。その 3 割 220 万人分の水田が東日本大震災によって塩水につかってお米が作れなくなった。

村というのは、人がムラ（群）がるというのを語源としている。田んぼができ水をひき室町時代には現存する約半分の村ができていたとされている。明治の時代には 3000 万人いたが 9 割は小さな村に住んでいた。一つの村は 350 人くらい。それが集まって日本を構成していた。東北は 7000 余の村の集まりだった。人間は現在までに数倍しか増えていないにもかかわらず、エネルギーの使用量は膨大に増えてしまった。

自給率 107%となっているか、何故米ばかり作っているのか。お米は、長期保存もきくし、栄養価も高い。東北で生きていくための最大のインフラである。昭和 40 年に行った減反政策は農家の人々に失意を与えた。自給率が 100%になったとたん数字上の問題でなぜそういう政策を行うのか。

350 人程度の小さな村は何故何百年も暮らしの場であり続けたのか。そこに学ぶものが必ずあるはず。その場に住む村人は「持続可能な社会とは言わないが、持続可能でなければならぬもの。そしてそれは食料である」と言った。人間は食べ物を食べなければ生きていけない。

まず、よい地域のポイントの 1 つめは、よい自然風土があること。自然風土は私なりの言い方で、村の人はこのようには言わない。村の人たちは「水と光と風と土は大事」と言

う。そこに知恵をめぐらし技を行使していけば必要なものは作れるということ。ただし、自然を人間は作れない。だから自然は神だと呼ぶ。エコロジーなんて言葉のない時代に、村の人はこの大切さをどのように伝えたのか。例えば「水を汚すな、神様のバチが当たるぞ」と言った。エコロジーなんて言葉ではぬるい。そうして自然を大事にした。そして自然は山と海、川、沼、田んぼ、畑に人間が働きかけ共存し自然の恩恵を受けながら 100 年、1000 年と村は続いてきた。ところが戦後日本の社会の豊かな象徴として、エネルギーを大量消費する産業社会を形成し始めた。人々はモノの豊かさを覚えお金でなんでも買えると思うようになり、村から出ていく人々が増えていった。残った人たち、過疎地域の人との距離が離れていった。

2 つ目は、よい仕事の間があること。仕事はお金になるだけではない。企業社会は定年というものを設けたりしているが、農業には小さい子どもには子どもの、年寄りには年寄りの仕事がある。しかし、農業はいい仕事である前に、産業社会の中で後退の一途をたどり、現在の農業者人口は 260 万人くらいしかいなくなっている。このことが食べ物に対して問題となっている。1000 人の人口を 4 人が支えている状況。今日は若い人も多いので聞いてほしい。持続可能な社会にとって、心配の要素として農業従事者の約半分が 70 歳以上の老人たちによって食料が生産されているということ。そして 39 歳以下の人たちの人口はどんどん減っている。日本という経済社会では農業で生活していけないのが現実である。

漁業も同じように、現在 12 万程度しか従事者がいない。食べ物は自然に働きかけないと育ってこない。そして 7 割は 50 歳以上になっている。漁業集落の現状を把握してくれないと、ただ単に彼らに高台へ移転するようなことを決定してはいけない。現在、国の方々の判断と漁村の人々の間にはかなり大きなギャップがあり限界点にきていると感じている。再度、現場からどうしたいかをくみとることが必要だと感じる。今回の震災でかなりの被害が各漁村で起きている。復興をただ単に産業の復興として考えるのではなく、日本の食料を立て直す意味で真剣に考えてほしい。漁業従事者の家計はかなり厳しい。

現在、日本には約 420 万人の企業があるが、そのうち 99% が中小企業である。1 万 2000 社の大企業が全体の約 30% の雇用を持っているが、津波被災地域には約 8 万社の企業があり、地震被災地域には 74 万社、原発避難区域には 8000 社となっている。そういった中で、地域に寄り添う形の仕事が増えている。直売所などがそうである。

村社会では自分の建物は自分で、というしっかりした気持ちがあった。その中で足りないものはお互いで助け合うという相互扶助の仕組みもあった。塩や砂糖も買ったりはしていた。しかし現在は、自分で作るということは全くなり、相互扶助の仕組みも紙っきれになって市場経済に左右され翻弄されるようになってしまった。これからは、もう一度自分たちの手で相互扶助の領域を含めて取り戻すことが必要だと私は思っている。

そして 3 つ目がよい居住空間があること。これはどう立て直すかという領域である。栗駒の内陸地震では、もう戻ってこないといった人たちも必死に戻って立て直しを図っている。復興プランを偉そうに作って押しつけるのではなく、もう一度、傷つき疲弊し憔悴した中から自己を取り戻し、生活していこうとしている人々を支援していく復興支援プランが必要だと思った。その支援の一つは、私も協力できることがあるなど思っている。

4 つ目がよい文化があること。今日説明する時間はないが、働くだけが人生ではない。

人は皆と一緒に楽しむものであり、これを文化という。それぞれが持ち寄って集まることによって祭りが生まれた。補助金によって文化が生まれるものではない。伝統は楽しみを求めることが伝わったものである。

もっとも重要なことは、よい仲間がいること。良い仲間をどう集められるかということ。そして、良い学び場があることも非常に重要なことである。文部省の勉強は、どれだけの知識を知っているか、知っているためだけの勉強だった。しかし短期間で身に付けたものはあっさり忘れてします。知るために学ばな、活かすために生きるための学びをしようと村の人々に教わった。例えば小さな村に、月々30万円の仕事をさがすのではなく、月3万円からの仕事を一歩ずつどうつくり上げていくかを考えていくことが必要である。

7番目の行政だが、これは良いイメージが何もないので、特に書いていない。

理想を言ってもできなければ仕方ない。しっかり成し遂げようという気持ちが大事だ。

(文責 事務局)

ワークショップ「子どもたちにどんな地域を残す?～2030年の地域を考えてみよう～」

ファシリテーター 藤村コノエ

環境文明 21 が提案する「2030年持続可能な社会」の説明の後、各会場ともに4つのグループに分かれ、上記テーマについて話し合いました。その後、話し合いの内容を発表。各講師にもコメントも頂きながら、持続可能な地域のイメージを膨らませて行きました。ここではその様子と、グループワークの一例を紹介します。



よる眠る街仙台！！

まちづくり

環境エコタウン
実践都市

お茶飲みの
場のある街
街の縁側

ご近所で
エネルギーの貸借
をしている
(バッテリー等)

エネルギー

太陽光、風力、
水力等、自然エネ
ルギーシティ

バイオマス発電
(海草、植物)

コンパクトシティ

移動

「歩くが基本」の
都市作り

自転車で
移動できる街

トラムが走り、
自転車が走り
やすい町

市内コミュニティ
バスを運行
移動が楽にできる

カーシェアリング

産業・仕事

六次産業
仕事の細分化
能力に応じた
仕事につける
障害者・高齢者も

みんなが生産者

ものづくりの
川上から川下まで

コミュニティ

ワクワクする町
文化があふれる！

子供たちと
お年寄りの交流が
普通にある
知恵の伝承

子供・お年寄りにも
役割がある
生活の1シーン
に関わる

医療・福祉

高齢者が安心して
暮らせる町

暮らし

晴耕雨読が
暮らしのリズム

木質系住宅

防災

防災都市
「マリンプレート」

緑あふれる町
花づくりガーデン
シティ

海洋資源を
生かされる町
海洋バイオマス
シティ

教育・文化

出身地仙台が
国際ブランド
“サステナブル・リ
バイバル”
“ミラクル・リカバリ
ー”
=誇り

“仙台人”としての
誇りを持っている

アウトドアや芋煮
会などコミュニティ
単位でもっとイベン
トをする

切り身じゃない
社会

自分と歴史が
つながっている

【講師のコメント】

なぜ？

- ・夜は楽しもう
- ・地域の仕事場
- ・人が幸せになる技術 「歩くまち京都」「クニハウス

ねる子は育つ！！

気仙地区1班

教育

海、魚食文化を学べる町にしたい
(体験学習)

考える教育を
したい
根付く社会

川で水遊びが
できる社会

海がきれいな
社会・地域にしたい

施設への移動は
可能な限り
公共交通機関が
使用できる

大会を誘致できる
体育施設を

地域

お年寄りが健康で
過ごせる町にしたい
(健康学習)

若者と老人が
助け合える社会

子供がいっぱい

若者とお年寄りが
バランスよく住める
町にしたい

若い女性が集まる
所は人口も自然に
増えそうな気がする

一家に一畑 自給自足

治安維持
安心なくらし

広域で物々交換
物々交換や
労力交換で
お互い様の社会

地域が地域を
活性化できる社会

共同作業を大事に
して人々の交流が
できる社会

伝統や歴史を
大切にする

お金のかからない
社会

地域内で廻す
お金の役割を弱く

一人一人が役割を
持ち果たせる社会
固有名詞の
一人一人を大事に

エネルギー

地元で使用する
エネルギーを
自分達で確保する

産業

生業で暮らせる
人々の総和が地域

ブラックボックス
のない技術
少しの知識で改造や
修理のできる製品

三陸の海をアピー
ルし、海産物の
流通、加工品の
生産を増やす

モノづくりの充実
(食べ物 etc)

1次産業から3次産
業までが集中し、
共存できる街に

防災

小さな戸建住宅
(気仙杉で)

高床式住宅

災害に強い街
ハード・ソフト共に

災害・防災学習が
できる町にしたい
(体験学習)

【講師のコメント】

- ・独 クラインガルデン
- ・露 ダーチャ 制度がある
- ・耕作放棄地→田園住宅
- ・衣食住+道楽

地方・都市・世界が
つながった社会

行政ではなく
民間主導の社会

オールシーズン
振う町

都市とまったく違う
価値のある社会

仙台地区 講師コメント

仙台 1 班

加藤：大変素晴らしい発表で、発表のやり方も非常に説得力があって非常に素晴らしく、さすが仙台のキーパーソンは違うなと思いました。また、テクテクノロジーで築く夜眠る街仙台、これは私のように 70 代に入った人間は極めて良く理解できるわけです。その反対語は超ハイテクノロジーで、24 時間眠らせない街、24 時間常に開いている街仙台というのが、いわばこれの反対側にあるわけですね。私のような人間はそんな街は困る、まさにテクテクノロジーでいいんだという風に思うし、ちゃんと夜は寝なさいよ。私なんか 70 過ぎたら 9 時過ぎると眠くなって、2 年前くらいまでは 12 時頃くらいまでは起きていたんですが、最近はよく寝るんです。だからいいんだけども、一つ、果たして子どもたちがこれにわくわくするかなと。いま 4 歳になる息子さんがいるとおっしゃいましたが、小学校に入る、中学校に行く、そうすると仙台はやっぱハイテクでキラキラしていて、24 時間常にどっかが開いていてディスコに行こうと思えばディスコにも行ける、買い物もできるというのに、もしかするとあこがれるかもしれない。だから、なぜお父さんたちが、第一グループの方々が、テクテクノロジーと言う言葉をあえて使うのか、ハイテクじゃないよ、それから 24 時間眠らない街じゃなくて夜になったらちゃんと眠りなさいよということの価値、説得力ですね。子供や青少年に対する説得力があるかなという点がちょっと気になりました。そこがうまく説得できれば素晴らしいなと思います。

藤村：そういう知恵は追々このワークショップで学んでいきましょう。でも、今日こんな話したよと言うのを伝えていただければと思います。

内藤：私は実は新しいテクノロジーという本を書いたりしていますが、今日はじめてテクテクノロジーという言葉を知って、なるほどなと思いました。それで、何故今までのテクノロジーがこういうことになったのか、一言で言えば、企業の金儲けが主目的だったと思います。それ以外に作られた技術って皆さん思いつきますか？大体は産業界が利益を上げるためにあらゆる今の周りの技術は開発されてきて、かなりのものは私たちが必ずしも欲していなくてもいろんな形で使われているというような技術に対して、テクテクノロジーの定義は、私はそうじゃないと、株主利益とか企業利益でなくて、みなが幸せになるための利益だという風に実は定義しているんです。だから、そのへんがもし共通認識があればうれしいなと言うのが一つでございます。それと細かいことですが、歩くことがテクテク歩くことに掛かっているんですが、私は京都を歩く街京都にするということできずと役所と関わってやってきて、いよいよ市民憲章までできました。歩く街京都の市民憲章が京都に行かれたら、いろんなところに貼ってるかもしれませんが、それに向かってかなり具体的に急ピッチで動き始めています。その中で議論したことは先ほどの発表の中でおっしゃったことと非常に似てて、これからの時代はそういうことに対して反対する人はそれほど多くない、合意が得られつつあるのかなという風に思います。歩く街京都と言うのを検索していただいたら、今の動きや市民憲章も出てくると思うので関心があればどうぞ。それと街の縁側というのは、よそのパクリであって、京都である教授がリタイアして、自分の家を使ってそこに金をかけて街の縁側、クニハウスを作っておられるので検索してもらえばいいかと。すごく素敵な理念で私も少し貢献をし

たんですが、検索してもらえれば面白いと思います。一人一人のレベルが高くてびっくりです。

結城：人間の生涯、100まで生きる生涯から90近くまで生きる生涯、これまで寿命は延びた、それに対して地域社会のどっかに生まれながら、出ていく場所は企業社会だったんです。僕らはそれが成長と言うものでどんどんあがっていけば豊かになる、なったと思うんです。その中で仙台は半端なくらいで止まってくれたから、地域社会というのがわりと強いのかなど。農山村社会で、企業社会のレベルが少ない分だけローカルといわれているんです。でもあえて図式的に男女でこっちが生活です。こちらは生産かもしれませんが。子供があり、これが少なくなっていくのを少子、こっちが増えていくのが高齢者です。要は、その間に、ここが機軸になったかのように、非常に存在感が失ってしまったのを、もう一度、これが下がったりしてもここが充実していくために我々は何が出来るのだろうかと考えていくことが、未来を考えることであり、そういう意味でテクテクというのは。そのときにこちらは30万になるよっていうけど、ここは3万円しかないが多種多彩にあるよという、3万を5つやってるから15、十分ですよみたいな仕事や暮らし方のイメージみたいな。だから夜はいいですよ、眠りましょうよという。冬は楽しみましょうよというのが東北だ。日本で一番冬に休みが多いのが東北です。働くのは春から秋にかけて。冬は楽しもうぜというのがなんとなくあったんです。今はそれを聞きながら、夜は楽しもうやというのが加わってくると、24時間起きてるほうが楽しくねえよという風になってくれたらいいなと思いました。それと同時にこれをこっちがわじゃありませんが、若干、これ65歳、これからの仕事、男鹿の村(?)おやき、8億円、おやきだけで。この会社、60歳入社。定年なし。こういう会社を、もらう金は3万か5万。60歳は終わりで、あとは地域に必要な仕事場。ここに60歳入社。それにはここでしのいでるけどこれからは。これを変なマーケティングの対象にしないで、ここにもってるクリエイティビティ、仕事を作る力、地域を良くする力を60歳入社、定年なしの小さな会社をいくつも作りませんかというのをお話ししながら終わらせていただきます。

仙台2班

加藤：このグループも非常に明確で、ターゲットを「食」に絞って、そこから色々で出てくるんですが、非常に分かりやすい、筋が通ってる、説得力があると、第一グループに対して申し上げたことと同じですが、私みたいに年を取った人間から見ると「食」がいかにかに大事か、今のままの日本の食の状況だったら将来大変なことになるんじゃないか。私も内藤先生もそうですが、戦後の食糧難を知っている。たまたま今、朝ドラで戦後の食べ物の厳しいときに着物を持って行って農家で代えてもらう、けどなかなか代えてもらえないというのがあったんですが、まさにああいう時代に育ったわけです。ですから、そういう人間から見たら食というのはよく分かるんですが、先ほどと同じで、子供たちがその食の重要性を相当きちんと説得しなとなかなか理解できるかなあという感じがあるんですね。「えー、食なの?」「農業なの?」「なんで?」「それが夢なの?」「未来なの?」。自分たちが思ってるのはもっと素晴らしい車を作る社会とか24時間眠らない街じゃないですが、もしかすると、そういうところに夢を抱いている若い人たち、子供たちを説得することが出来るかなというのが気になるところです。別に説得できない

とっているわけではありませんが、きっちり説明しないとなかなかそこにいけないかなという感じがあります。

藤村：私たちもずいぶん「食」について昔から内藤先生たちとも考えてきて、「食と環境倫理」というブックレットも出しているのですが、関心がある方は言ってください。今、加藤さんが食の大切さって言いましたけれど、私もずっと環境教育をやっている立場からすると、自分で育てたものは必ずありがとう、頂きますとって食べると言いますよね。そういう意味でこちらでも体験、体験学習をしましょうというのが出てるんですね。やっぱり説得するよりもむしろ子供たちをそういうところにどんどん連れて行って、自分の食べるものを自分で作る、大嫌いなピーマンでも自分で作ったものは食べるって言いますから。

内藤：私、実は来年の4月に淡路島で初めて大学誘致の協力をいたしまして、その大学の学部の名前が地域再生農学部という学部なんです。やはりここでおっしゃっていることを現場で実践してみよう、淡路の農業の中で学生を育てるということを徹底してやろうという計画です。これはたぶん日本でもわりと珍しい、ひょっとしたら最初ではないかといわれています。当然、加藤さんのおっしゃるように今の若い子が農業に来るかなといわれると大変心配で夜も眠れないんですけどね。まあたぶん、だいぶ変わってきているという読みがあるから私立大学もわざわざ進出しようとしているんですが。データは確かにそうってます。特に女性がたくさん来てくれるのではないかというのがあります。

藤村：食の安全性には特に女性は敏感ですよ。でも、やっぱり今考えなければいけないのは安全性だけでなく、量の問題も考えないといけないという時代です。実は私たちも2030年を描いたときに、日本もそろそろ食の配給制度を準備したほうがいいと加藤さんが言ったんです。私たちはそこまで考える必要はないんじゃないのと思ったんですけど、今の状況を見ると、本当にそういうことがありうるかもしれないって思うんです。安全性というのも大事だけど量のこともしっかりと考えていくような、本当の意味の食育が必要なかなと思います。

仙台3班

藤村：自由で価値観の共有し合える社会って理想ですけど、なかなかやっぱり難しいですね。ここは責任を認識する社会、今の社会は誰も責任を取らない社会でそれを変えたいという大きい方向性はあったんですけどね。具体的などころではコンパクトシティがいいのか、そうじゃない方がいいのかとか、今日のお昼のように皆同じお弁当がいいのか、バラバラの方がいいのかとか、色々な意見があったということでした。でもそういう議論を重ねていくのは、本当に大事なことです。 (班員のコメントを受けて) 彼は人に喜ばれる仕事を生業としていやっていきたいと考えているし、そういう仕事が増えるといい社会にたぶんなるんだと思います。

結城：これ自体に対して意見はないです。しかし、なぜ日本の中でムラ社会が長く持続できたか、ある意味ありがたい社会だったということなんですね。でも、ただありがたいっていうと裏側は見えなくなるんですが、その代わり、人間側から言うとわずらわしさもあるんです。実は大変さとありがたさが表裏になっていて、その両方を受け止めないとムラを生きるのは難しいんです。都市は便利で、会いたくなかったらシャットアウト

したり、自分がやるのが面倒だったら金払ってやってもらったり、全部金で解決します。そうすると産業がいる、何がいるよってなるんですけど、ムラは産業もないし金もないのになぜ何百年も続いたかという、裏側でわずらわしさと付き合っていく、簡単に言うと、金に頼ったりしないけれど、わずらわしさに付き合っていくとありがたさに出会える。また、食べ物のことだけについていいますと、おそらく3つくらいしか方法は今、僕は考えられない。一つは自分たちのことは自分たちでやる、自給自足的な方法が第一です。これは国で言えばロシアの食料がダーシャという制度がある。大統領でも土曜になるとモスクワは金曜日の夜にみんないなくなっちゃって、自分で作ってます。2番目が自分にはできないけれど、自分に代わってやってくれる人にどうかよろしくお願ひしたいとお金を払ってやるような CSA (Community Supported Agriculture) の方法です。これは今、アメリカでやっています。もう一つは産業論で食料を考えず、存在論で考えるために農水省をやめて食料省を国民参加の下に展開していくという方法。この3つのミックスが僕が考える2020年、30年あたりの日本の食料の現状ではないかと思ひます。アメリカで CSA は今、1万5000農場に広がっています。なんでアメリカはでかい飛行機で種をまいたりするのかと日本人は思ひてますが、あんなの冗談じゃないってのがアメリカ国民です。自分のために作ってもらいたいって前金を払ってます。それを我々はメンバーといいます、彼らはシェアホルダーといいます。次の2020年、30年は日本人もシェアという言葉で当り前の言葉として使うようになる。シェアは分かち合うという意味にもう二つ意味があるんです。参加する、そして負担するという意味です。シェアは負担する、参加する、分かち合う、です。これは何かというと、負担するのはわずらわしいんです。分かち合うのはいいところだけ分かち合いたいという心理が働くんです。ムラ社会は、あえて言うならばシェアと言うものをベースとして、お互いための地域社会を維持してきた。「結い」なんてものは完全に皆いいとこばかり取りますけど、「結い」の裏側は結構大変でわずらわしいんです。そこも見ながら、そのわずらわしさはそこで生きていくありがたさや安心感に繋がっていくというように受け止めて、子供たちにわずらわしいこととも付き合っていくといい事に出会えるんだ、いいことの影には苦勞しているところもあるんだ、それを知らんぷりしていいことだけではだめですよ、と言うあたりが大事な点だと思ひます。

藤村：皆さんが言っていた責任を取る社会って事ですね。まさに同じですよ。

内藤：「絆」という字は、昔は「しがらみ」と読みましたよね。表裏一体なんですよ。利益も同じで、ものすごく便利で快適な利益と言うのは必ず裏があって、それがどこに行くのかというのが問題なんですよ。

仙台4班

加藤：とてもうまい素晴らしい発表をしてくださいました。4つのグループからの発表、いずれも非常に短時間にもかかわらず、常日頃こういう問題を考えていらっしゃるとは思えないにもかかわらず、わずか一時間半の時間の中で非常に素晴らしいなど。さすが仙台のキーパーソンは違うという印象ですね。あえてもう一言いうとすれば、今の第4グループもそうなんです、たくさんのおっしやって下さったんですが、文化と

か芸能という面が欠けていたかなという気がします。もちろんあったんですが。やっぱり仙台というと、わたしたち東京にいる人間からすると、七夕、その他、私たちの知らないことがたくさんあると思うんです。佐藤宗之さんの広瀬川だとかそういう素晴らしい芸術だとか芸能だとか、そういったものは持続可能な社会には欠くことのできないんですね。エネルギーだとか安全だとか住まいだとか移動だけじゃなくて、そういう点についても、色濃く入れていただけるといいなと思います。

結城：都市、新しい、古いで、日本で、ここが東京、仙台はこの辺にあって、ここに農山村がありました。我々が豊かになるというのは全体ではこっちに行くこと、この先にはニューヨークがあったかもしれない。でもそうじゃないなど。向上だけじゃなくてそれぞれのよさがあるんだ、そのよさをちゃんと引き受けて、評価できて、保管したり繋がったりしていく。仙台の食料自給率は6%です。今から20年前くらいは21%。仙台がかつての21あれば131くらい本当はあるんですが、ずっと食料政策は変化をもたないできた。だからそれを、ここだけで考えずに、東北の人たちとリンクすることによって、仙台というものの様々な営みが100万都市の食べる人たちと作る人たちの融合をどういう風にしていくのかがとても重要なスタンスだと思います。食べる人たちとうまく繋いでいく。それがないと今までのように市場あるいはマーケットの思惑に翻弄されることになってしまう。そうではなくて仙台100万都市の食料は俺たちが頑張って支える。100万都市の人々よ、我々とも繋がろうではないか。それをうまくやっていくのが仙台市の重要な役割です。東京は残念ながら出来ませんでした。最後に、蛇足をいうと、白河は白河以北一山百文と言われ、東北なんていうのは何の値打ちもないものだという新聞屋もいた。それをそうさせないために言論が展開してきた。そうさげすまれた東北の地が今、日本で一番食べ物が多く、しっかり頑張っている。だから遅れているともいわれているが、その地にとどまっている人達は一生懸命考えているんです。冗談を言うならば白河以北の白河の関の食料をストップすると困るのは誰でしょう。それくらいしないと、作る人たちの側に食べる人たちが向かい合わないんです。5年くらいは金があれば何でもなると思っている。でもだんだん金があっても食べ物が手に入らない、いろいろ売ったって入らないぞと言う風になってきて初めて気付く。要するに近代の戦争史を現代の戦争を含めてやると、必ず食糧危機と食糧不足は戦争を引き起こす。そうならないためにも、食べ物をつくることは重要。最後に、食べ物は自然という大変難しいものの上に人間が働きかけて得るしかないものです。100円コイン、500円コイン入れて出でくるものではないことを理解することを僕らがやっておかないと、たぶん更に大変になっていく。僕の予測だと5年以内に起こる。これはたぶん当たると思います。それくらいこの国の食料はやばい方向に完全に差し掛かっている。

藤村：今、先生は東北のことをおっしゃいましたが、私たちは常に地球温暖化という方向からもそのことは言っている。今、海外で取れるからお金で譲ってもらえるけど、自分たちの国で取れなくなったらアメリカだって中国だって売ってくれないよ、そうなったときにどうするのかを常に考えておく必要があると。それと、まさにおっしゃいましたが、自然の恵みを受けて出来る食料を、なんでどこでも作れる工業生産品と同じ貨幣で量るのかというのも言い続けてきたことなんです。違うということですよ。そこでTPPみたいなことをどう考えたらいいいのかというのが出てくると思います。

内藤：いろんなところで作業をやってきましたが、今日ほどレベルの高いところはど
うグループなのかなと改めて、感心しています。全体についてはほとんど言っ
たのですが、たまたま地域通貨とおっしゃったので一言。これはなかなか長いこと
言われていて現実には難しいんですが、通貨コミュニティステーション、地域通貨、
リンカという通貨がようやく実現して発展しつつある。それを見た色んな周
辺のコミュニティが真似しようという動きが出てきています。情報を検索して
いただいたら何故うまくいったかなどヒントを得られるかなと思います。

気仙地区 講師コメント

内藤：将来のビジョンとは、どんな社会を目指したいかといういわば環境、経済、社会などです。そして国の段階ではそれではどんな手段で実現していくのかというのがシナリオ。これは色々なやり方があると思います。最終的にはそこに至るまでの20年先まで誰がいつどこでどんなことをするのかというマップ、の三点セットが必ず必要です。今日は一番目で完結だろうなと思います。次に、そこに行くという想定でこのビジョンをお作りになっていると思います。それから、このグループでやったら、好き放題言ったらどんな社会になってしまうのかと言うことを少しフォローしておかないといけない。それやったら経済めちゃくちゃになるよとか、それやったら環境が実はすごい悪くなるかもしれない、エネルギーをすごい使ってるかもしれない、いや案外、省エネ社会になってるかもしれない。そういうことをちょっと横で専門家がフォローする仕組みがいずれ、いるかもしれませんね。

藤村：できたらこの場でも少し皆さんなりに自己評価をしてもらえばいいと思います。

内藤：定性的に。我々は定量的にやるのが仕事ですから、膨大な産業関連モデルや経済モデルを聞きながら動かさないといけない。先生はそういいますが経済はこういう風に落ち込みますよだとか、いや、循環的な地域経済は落ち込まないとかいうのを後でバックアップしないといけない。どんな手段でというのは、こういうのがあるじゃないかとか、行政がこうやれとか色々注文を出すわけですが、それに対して具体的にそういうことの可能性や制度的な可能性展開とか、一部専門家がここにいたらフォローしていただく必要がある。それから、誰が、いつ、どこで、というのは口で言うのは簡単ですが、そういうことをやるときにいろんなノウハウとか、技術でこういうことをやったらいいじゃないかというときに、そのときまでにこんな技術が実現可能なのかということが、専門的なバックアップが少しあれば完璧になります。そういうところで私達が少しでも役に立てばと思います。

気仙1班

藤村：私は別府の育ち。それでマグロは好きでなくて自身がすきなんです。土地のものって本当に美味しいですね。東京に最初来たときに赤いお刺身って色がついているのかと思ったんです。九州はあまりないので。という風に食文化は地域にそれぞれありますね。大事ですよ。

加藤：一家に一つ畑がある、そういう町にしたいというのはなかなか面白いなと思いました。面白いなという意味を、二つ例を挙げましょう。一つがドイツ、一つがロシアなんです。ドイツではクラインガルテンという、言葉を聴いたことありますでしょうか。よく環境関係の人がドイツの町に行ったらクラインガルテンがあるといいます。クラインガルテンは、文字のとおり小さな庭って意味なんです。ただども日本人で、特に都会育ちの日本人を見ると、小さな庭っていうのは小さなものかなと思うんですけど、実際に見るともうちょっと大きいんですね。それは何故かという、ドイツは第一次世界大戦、第二次世界大戦で、ともに徹底的に敗れてものすごい飢餓を受けてるわけですね。現在、ドイツの自給率が非常に高いのはその経験があるからなんです。その第一次世界大戦、第二次世界大戦で負けて、非常に食べ物に苦しんだので、いざというときのため

にクライנגアルデン、つまり庭をみな持っているんですね。都会に住む人は少し郊外にもっている。もちろん全部をまかなうのは無理ですが、最低でもある一定量の食料、野菜とかジャガイモとかはとれる。普段は花などを植えてるんですね。それで日本人はそれを見るとききれいなお庭があつていいねという話になってしまうんですが、いざというときは食糧生産になるということです。それからもう一つ、ロシアのダーチャ。その意味は、ソ連が崩壊したのが 1991 年、そしてエリティンが出てきたわけです。このときエリティン政権下で爆発的なインフレになって、物の値段がめっちゃくちゃになったんですね。そのときにモスクワに住んでいる人達は飢え死に状態になったが、それが少なかったのは、ダーチャという、ドイツのクライנגアルデンと同じようなものがあつたので、救われたんですね。1991 年、92 年、93 年とエリティンが大統領だった頃、そのあとプーチンが出てきてロシアは復活するわけですが、エリティン時代に毎週、ダーチャに行つて食べ物を作る、それで一家の飢えをしのいでいたわけです。ただ、高田でそれだけでは面白くないんじゃないかと。せつかく高田なのだから、佐藤さんが話してくださったように魚、海を活用する。一家に一海というわけにはいかないですが、そのくらいの気持ちで生簀だとか養殖魚だとか、そういうのをくっつけてくれると面白いと思います。

結城：エリティンの奥さんはトマトを育てるのに忙しいから勝手に行つてこいよ、と、それがロシアの国なんですね。ロシアのジャガイモの 7 割から 9 割は個人個人がダーチャで作っているという説もあります。自分の食べ物は自分で、そのためロシア連邦法 36 項では、公領地が使えるのであれば、市民から申し込みがあつたら貸さないという法律があるんです。これがダーチャを裏付けているロシア連邦法 36 項だつたと思います。環境文明 21 は政策提言をしているから、そこまで行ってほしいと思う。一般的には埼玉と同じ広さの耕作放棄地があると言われていています。東北にもそのうちの 2 割があると。そうすると耕作放棄地をどうするかといったときに、農水省に任せるとだめです。それを行政が公的不動産をやりながら、1 ha 1 町歩で、住宅面積が 20 坪、農地は 300 坪、これで七棟たつ。3 割の共有スペースには農器具の共同使用倉庫にして直売機能をもたせる。いわゆる共有スペースをやりながら。3 年間早稲田大学の建築学部と東大と私の三者で田園住宅構想というのをやった。今から 40 年前に私達はなぜ農村を捨て都会に行つたか、ああいう 2DK にあこがれて、ここの暮らしはだめだと、金さえもらえればそれでいいという事で出て行つた。しかし、もう一度土の上にある暮らしを大事にしたい。それが全部だとは思いませんが。そういうときに 300 坪だと 3 人から 4 人の家族が食べていける庭ができる。そうやって食べることをわが手でやりながら、それをお魚と交換する、きのこ交換する、いろんなものと交換する、それが自然な生き方。そこで出来るものを食べるのだから、おのずとそこに対する配慮が出てくる。そういう意味で衣食住道楽、まず整えるべきは衣食住。道楽はあと。これをわが手で、地域でできるようにすることが基本的にはこれからの地域を考えるときに必要な事。それを誰か他人任せ、金任せにすると足をすくわれる。それらを整えればあとは、それ以外がなくてもいい人生は営めるはずだというのを、じいさんばあさんが教えてくれたことだと思います。

藤村：一生懸命仕事をどうしようか、いかに稼ごうかということに心がとられて、そういうことを忘れてしまいがちですが。

結城：そのプランは 300 坪の農地、そのうち 20 坪の住宅を建てて 800 万円という住宅で

す。そして地元の木を使っています。コンポスト、ペレットが基本仕様。エネルギーの問題とか廃棄物の問題とか様々な問題を、そういう住宅構想を農家では発信していけるようになる。そういうことを是非政策でやってほしい。

藤村：今の話を聞くと、大手の住宅メーカーじゃなくて地元で家を作り、そのときに地産地消のエネルギーが生まれてくれるという可能性もあるんですね。最初に加藤さんが言ったように、エネルギーだけに興味がある人、何とかだけに興味がある人っているけれども、総合的に考えてくださいといったのはそういうことなんです。思わぬところから自分のところとのつながりが見えてくるし、思わぬところからグリーンビジネスが生まれてくる可能性もあるということです。そういう目でこれからの話を聞いてもらえるといいなと思います。これから温暖化が進むと、東京の食料自給率は1%ですからね。今、海外から買っていますが、どこも売ってくれないという時代がくるだろうと思っています。さっきの私達の2030年の中には、そういう食糧難の時代がやってくるだろうことも考えています。配給制度という時代がくるんじゃないかというころまで真剣に考えてるんです。それで私達のような都会人で農地のない人間は、農家の方と仲良くなろうと、例えば伊藤さんとも仲良くなったんです。ということで農と職ということに関わる暮らしというのは、すごい強いということですよ。

気仙 2 班

結城：参考までに、沖縄の人がこの辺も含めてきています。たくさんの資源がきていて、昨年4月5月くらいは雇用がないといって、その後また来て、この惨状、戦争直後の焦土と化した沖縄と同じにダブりますっていわれたんですね。びっくりしました。沖縄は江戸時代には琉球薩摩に支配されました。近代国家の日本の光は少しも当たりませんでした。戦後は米兵に占領されました。今でも軍事を押し付けられています。しかし、沖縄は立ち上がりました。その立ち上がる力は、「ゆいまーる」です。お互いに支えあう。国家の力でも、経済の力でもなく、ここをもう一度生きる場所とするために、共同という「ゆいまーる」の様々なお店が共同店です。全戸出資、全員出資のお店が今も72箇所あります。そこで出た利益は皆に役立つものに還元されるというので、106年たちます。そんな知恵を、僕はこの十数年、沖縄に通って学んできました。三陸のために沖縄の焦土化した、絶望したところから立ち上がってきた沖縄の文化を役立てることが出来ないでしょうか。私達が一生懸命お手伝いしますという風に言っていました。僕らはいろんなものがありますが、沖縄はそんな力は何もなくまだマイナスを押し付けられながらも、ここまでこれた。それは何か役に立ちそうな気がしますとってくれました。すごくありがたいし、うんとヒントがあるんじゃないでしょうか。そういうことも頭に入れてもらって、三陸やここだけではなくて、ほんとに壊滅的だということを経験してきた地域がたくさんあって、立ち上がってきました。そのときの経験を共有して学んでいくということも、これを聞きながら思ったんです。

藤村：私達環境文明21も政策提言だけではなくて、どういう地域が元気があるかなというので、環境や資源を使って元気な街というのを幾つか廻っていて、共通点をいくつか見つけ出しました。その一つがないものねだりをしないこと。自分のところにあるものの価値を見出してそれを大事にしていく。さっきどこかでやっていたものをもってきて

真似をしてもだめだといいました。仕組みは真似てもいいかもしれないけれど、もともとなる資源はここにしかないものを使うというのが大事ではないかと。ここにしかない独自の資源だったり、人だったり、それを使うのがとっても大事なことだと思います。それと元気なリーダーがいること。元気な街には元気リーダーが複数いるというのがありました。ここの皆さんはキーパーソンで、複数いるということで可能性は大きいなという風に思います。

気仙 3 班

藤村：第一次産業がもっと元気にならないといけない、特に東北はそれが基盤というのは午前中の先生方の話とも相通ずるところだと思います。そしてなにより、住んでる人がここが好きというのが大きい要素だというのはこちらのグループでも出ていましたね。

加藤：もちろん海を中心に高田といえば海ですから、漁業も含め、農業、林業を考える、そしてそれをいい街にしていくというのは大賛成なんですけど、聞いていてここは途方もない被害を受けているので、それに対する対応策、またいずれ来る可能性は高いわけですから、高田の街を考える際に、やはり防災というのはいくらかの形で入れておいてほしいというのが一つですね。きれいな海を見たり、美味しい魚を食べたりして楽しむのはいいんですが、いざという時にちゃんと安全に避難できる場所を確保したり、訓練をしたりというのが一つですね。それから、もちろん時間がなかったから食を中心に話を進めたのはいいんですが、もう一つ大事なものはエネルギーなんです。この地域は、エネルギーは自然エネルギーを中心として、化石燃料とか原子力ではないですが、そのエネルギーの話もあると、食とエネルギー、自給率を高めていって普段は安全に楽しく美味しく生きると。そしていざというときにはさっと逃げられるという構えがあるとよかったなと思いました。

藤村：でも「苦しいことも必要、乗り越える力を育てる」というのが、あるのでその中に思いも入ってると思うんです。こんなに夢ばかりでいいのかという話が出たのは非常にいいことですね。

結城：魚でどんこがいますよね。根を知って、取り方が传承されてるんですね。地中海のマグロで日本の寿司が情けなくなった。日本海の魚は分けわかんない魚、でもうまいんですね。定置網の魚を調べてみてください。300 くらいの食べられるものがあると思います。それが寿司になる。海草が9種くらいある。資源の豊かさを目の当たりにすれば、何がどこにあるのがわからないので、是非猟師から受け継いでください。猟師と漁船は違うんですね。猟師は体で覚えている。漁船はサラリーマン。ここには猟師がまだいます。環境も自然もわかっている。そういうことを受け止めていただければいいんじゃないでしょうか。

藤村：今日は時間がなくて地域の宝物探しをやらなかったんですが、そういうことを積み重ねていけば、知恵もまた色々増えてアイデアも膨らんでいくかなということですね。

気仙 4 班

藤村：適度な人口はすごく大事だと思います。日本の人口自体も減り始めているわけだし、高齢化も進むし、たくさん住む必要はないけど、そこに関わる人が増えるというのが一

番いいと私達も思います。それから、お年寄りが増えたりすると一人で食べるのは寂しいから地域の食堂みたいなものができて、皆で集まって地元のもので作れる人が作って地域の食堂みたいなものが出来るといいよねというのがあります。都会人だとそういうことを思ってるんですね。本当に素敵だなという風に思っております。ただ、ゆとりというのがある年齢になるとすごく大事だということは分かるんですけど、やはり若い人たちには刺激だとか都会への憧れというのがあります。だから一度出ていっても、そのうち帰りたくなる町を作るというのも一つのやり方なのかなと思います。

加藤：まず、第4班の発表でうまく伝統・祭り、適度な人口、自然・環境という具合に大きく三つにくくって良いと思います。特に伝統・祭りというのはすごく大事だなと。しかし、一番難しいのが適度な人口なんですね。先ほど、350人くらいで60世帯くらいで仮に考えると、一世帯5、6人いなくてはいけないんですね。ところがもう日本全体は一世帯あたり2人かそれを切ったくらいなんですね、非常に急速に単身世帯が増えてきています。高田に限らず東北地方は人口の過疎化が進んでいて、高齢化も非常に早く進んでいくわけですから適度な人口というものを維持するというのはかなり大変だと思います。只その一方で、内藤先生もおっしゃっていたと思いますが、食料の問題がおそらく5年とか10年の間にすごく深刻になってくると思うんです。荒っぽいい方をしますと、東京だとかそういうところでは生きていけない、という時代がやがてやってくる可能性が非常に高いんですね。そうすると人が戻ってこざるを得ない。分かりやすくいうと、戦後60年くらいでかつて農村にいた若い人たちがみな東京へ、大阪へ、仙台へと、大都会へ吸い取っていかれたわけですね。その大都会に吸い取られた若い人たちが過労死するほど働いて日本のGNPを上げて世界第2位の経済大国にしたわけですね。ところが、老人が増えてその活力が失われて、温暖化などの様々ことで食料の問題が出てくると、また潮が引くように地方にある程度、戻る。そうすると、もしかすると結果的に適度な人口が確保できるかもしれないけど、今の趨勢ではとても無理だ。適度な人口がいなくて伝統・祭りも出来なくなる。簡単に言うとおみこしも担げないわけですね。そこが一番の課題で、高田・大船渡に限らず、その人口構成がどういう変化をしているのかを、別の機会によく調べておいていただくといいかなと思います。各グループに通じていえることは、大変よかったなと。おそらく今日ここに来るまでは、このような問いを考えたことがなかったと思うんですね。瓦礫の片付けや仮設住宅、高台移転をどうするかということは考えていたと思いますが、2030年に子供たちに喜ばれる街はどのようなものかは考えたことがなかったと思うんです。そういう中で突然考えてみろといわれてもなかなか頭の中の整理が出来なかったと思いますが、その中で話し合いをして皆さんそれぞれ知恵を絞って良い線まで行ったかなと。あと5回ありますが、回を重ねるごとにしり上がりになっていただきたいと思います。そのためには、ここへ来たら、脳みそを振り絞って知恵を出していただきたいと思います。必死になって脂汗をかいて振り絞っていただく皆さんの身になる時間になると思います。

結城：中越の山古志村にずっと通っています。宮城岩手内陸地震にもずーっと関わっています。その人たちがどっか退避するときにあの家の猫がいない、あのばあさんがいないといったときに、ちょっと待てよと家に寄ったというのが非常に大事なんですね。都市は難しいですよと言われました。プライバシーもあるのになど、簡単に言うけれど、

顔が見えるというのはある意味でわずらわしいことでもあったり、困ることであつたりもします。しかし、ありがたいことでもあるんです。地域とは良い事だらけが良い地域ではないんです。良い事のためにはみんなの苦労やわずらわしいことをちゃんと支えたりクリアするから良い事があるんだという風に考えていただきたい。都市はときどき金を払えばなんでも良い事はかなうという幻想を持ちがちで、産業なり経済を伸ばすことが豊かに、幸せになれることだと思いがちです。

全体にはこの中で適当な人口と顔が分かるコミュニティは大事だということを言いたかったんだと思います。ではコミュニティって何なんだろう。「Share with others」です。コミュニティとは人と分かち合うことによって生まれるもの。そのシェアというのは分かち合わなければ無いんです。シェアには分かち合うという意味だけでなく参加するという意味もあります。もう一つ意味があるんですが、それは負担するという事です。わずらわしさに耐えながらも、そうやっていいものを分かち合えたり、そのために眺めているだけでなく参加もしなければならない。負担をしなければならない。そこから生まれるものがコミュニティ。お前がいてくれて良かったみたいなものです。そういう意味で4班の発表は、全部これから、あるいは、我々が急ぎ足で来てしまったために失いつつあったものを、もう一度見据えてそれを大事にしていこうよという意味でもよかったなと思っています。そしてここだけじゃなく、普段、ここで得られたものを近所の人や友人、知人に話し合いの場を持つときの参考にしていただいて、その広がりや少しづつ共通の理解と認識がある程度ないと、賛成か反対か、投票で決めますという議会的なものはどうしようもないんです。村が頑張ったのは寄り合いであります。議会はすぐに時間切れで投票に持ち込んで、結論が出たみたいにしますが、長老たちはそうじゃありませんでした。今日のところはこれぐらいで、また来週という、若い人達はあいつの言うことも本当かもしれないなと考え考えながら次に会った時は、あの時は違うと思ったけどお前の考えのほうが良さそうだとお互いが近づいていきます。そういう集まりのことを寄り合いといいます。議決でなくて寄り合いのスタンスを大切にしていきたいと申し上げて終わりにしたいと思います。

藤村：まさにここは寄り合いですね。寄り合いは時間がかかりますけど、寄り合いで一生懸命本気になって議論すれば、あとはスムーズに進むんですね。だからそれが本当の民主主義だと思うんです。それと、いい事だけじゃない。その裏には必ずわずらわしいこと、自由だけでなく責任を持ってやらなくてはいけないこともあるんですね。そういうことはたぶんこちらの話に通じると思います。また、そういうことを深めていけたらいいなと思います。